

フランクフルト思想とロゴセラピーに見るドイツ哲学の影響（1） ——カントを中心に——

竹之内 禎

【抄録】

本論文はヴィクトール・E・フランクルの思想及び彼が創始した心理療法＝ロゴセラピー（意味中心療法）におけるドイツ哲学の影響について、主にカント哲学との関連を考察する。フランクルが取り入れたカント哲学の論点は、主に『純粋理性批判』における超越論的カテゴリーの議論と、『道徳形而上学原論』及び『実践理性批判』すなわち倫理学の論点に関連する。フランクルにおける「意味への意志」はカントにおける超越論的カテゴリーに属するものである。またフランクルの倫理思想はカントと同じく義務論であり、カントが実践理性の働きとしたものを、フランクルは精神次元における良心の働きととらえている。

【キーワード】

フランクル、ロゴセラピー、カント、倫理学、純粋理性批判、実践理性批判

はじめに

本論文はヴィクトール・E・フランクル（Viktor Emil Frankl, 1905-1997）に強い影響を与えたと見られるドイツ哲学と、彼の思想及び彼が創始した心理療法であるロゴセラピー（意味中心療法）の関連について考察する。

ロゴセラピーとは、人間の根本欲求を「意味欲求」ととらえ、人間を「意味への意志」を持つ存在として規定し、その観点から意味の喪失感、虚無感を癒す心理療法である。なお、正式名称は *Logotherapie und Existenzanalyse*（ロゴセラピー及び実存分析）であるが、日本及び英語圏では、単にロゴセラピー（*logotherapy*）と呼ばれることが多い。

ロゴセラピーは、ドイツ哲学の影響が強く現れており、フランクルの著書の多くはドイツ哲学の諸概念への理解を持たない読者には理解が困難な部分が多い。そして、ドイツ哲学の用語は、日本語訳では日常語の意味から離れているため、哲学に通じていない読者には一層理解が困難となり、このことがロゴセラピー普及のハードルにもなっていると考えられる。そのため、フランクル思想とロゴセラピーの理解と普及を助けるという目的で、本論文ではフランクル思想及びロゴセラピーに影響を与えたドイツ哲学の諸概念について論じることとする。

フランクル思想とロゴセラピーに根本的な影響を与えているドイツの哲学者は3人いる。

カント、シェーラー、そしてハイデガーである。そのほかに、時折引用されるのがヘーゲル、ヤスパース、ニーチェらであるが、フランクフルが根本思想において依拠しているというより、フランクフルが自らの思想を裏付けるために引用しているように思われる。

このうち、本論文では、カント哲学の概念や論点の影響について検討する。フランクフルが取り入れたカント哲学の論点は、主に『実践理性批判』で展開される議論であり、すなわち倫理学、実践哲学の領域に関連する。

分析対象とする文献は、フランクフルの主著の中でも難解とされる理論書 V・E・フランクフル、山田邦男監訳、岡本哲雄・雨宮徹・今井伸和訳『人間とは何か 実存的療法』春秋社、2011 (=Viktor Emil Frankl, *Ärztliche Seeltherapie: Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse, Zehn Thesen über die Person*, 11., überarbeitete Neuauflage, Herausgegeben von Alexander Batthyany, Deuticke im Paul Zsolnay Verlag Wien, 2005) である。なお、この書物はフランクフルが晩年まで推敲を重ねたものであり、初期のバージョン (Viktor Emil Frankl, *Ärztliche Seelsorge*, 6. Aufl., 1952) を翻訳したヴィクトール・E・フランクフル、霜山徳爾訳『死と愛 新版 ロゴセラピー入門』みすず書房、2019 も、比較のために参照した。

1 フランクフル・ロゴセラピーの人間観：次元的存在論

前提として、ロゴセラピーが採用する基本的な人間観であるところの「次元的存在論」について整理する。

フランクフルが創始したロゴセラピーは、精神分析学ウィーン第三学派と呼ばれることがある。精神分析学の創始者であるフロイト学派を第一学派、そこから分離独立したアドラーの個人心理学が第二学派、そしてアドラーから分離独立したフランクフルのロゴセラピーが第三学派である。

この三学派は人間の根本欲求をどう見るかで大きく異なっている。すなわち、フロイトは人間の根本欲求を快感欲求 (殊に性的なもの) に求め、アドラーは権力欲求 (ニーチェの言葉を借りれば「力への意志」) に求め、フランクフルは意味欲求 (「意味への意志」) に求めたのである。

フロイトは生物が根本的に快楽を求める存在であり、人間も同様だと考えたが、アドラーは、人間が持つ力への意志、優越への欲求は、生物的な快楽欲求よりも強く根源的なものであり、生物的な欲求を抑えてでも人間はそのために行動しうる存在と考えた。フランクフルは優越への欲求、力への意志よりも、生きることに意味を求める気持ちが人間の根本欲求だと考えた。他者よりも優越したところで、「それにどのような意味があるのか」が自分自身で分からなければ実存的欲求不満 (実存的空虚、*existential vacuum*) に陥る。フランクフルはナチス強制収容所を経験しており、その奴隷労働のような日々では、快楽は一切得られず、優越への欲求も満たされることはなく、最後に残されたのは、それでも生きることに意味があってほしいと願う気持ちだったという。

この三者の人間観の相違が、それぞれの心理療法の違いとしても現れる。フロイトは幼少期に抑圧された快楽欲求を認めることで抑圧され歪んだ心理を解放しようとし、アドラーは心理的な抑圧の歪みを解放しようとし、 فرانクルは充足されない意味への意志、つまり実存的空虚を意味で満たすことに主眼を置いた。

フランクルは、自分自身を含むこの三者の対象を身体次元、心理次元、精神次元と区別し、フロイトの精神分析学は身体次元、アドラーの個人心理学は心理次元、自らのロゴセラピーは精神次元にフォーカスするアプローチと考えた。ただし、フランクルは、人間がこの三つの次元を兼ね備える存在であることを重視し、身体次元、心理次元への配慮も必要であると指摘している。そのうえで、最も見落とされがちで、最も見落としてはならない重要なものが精神次元だと主張する。

なお、心の作用のみに注目すると、心を「精神」(Geist / spirit) の次元と心理 (Psyche / mind) の次元の二つに大きく分けるのがフランクルの特徴である。フランクルにおいては、「精神」の次元は、個人的欲求を超えた意味を把握する「良心」(Gewissen) と、そのような意味を求める「意味への意志」の機能を持つ次元であり、人間のみが持つものとされる。他方、「心理」の次元は、動物的な自然な欲求の作用である。

フランクルは心理 (Psyche) と精神 (Geist) を明確に分けているので、勝田茅生が指摘するように、「精神療法」「精神分析」と訳されているドイツ語の Psychotherapie、Psychoanalyse (英語の psychotherapy、psychoanalysis) という語は、正確には、前者を「心理療法」、後者を「心理分析」と訳すべきである¹⁾。

先にも述べたように、ロゴセラピーの正式名称は、Logotherapie und Existenzanalyse (英語: logotherapy and existential analysis、ロゴセラピー及び実存分析) である。フランクルは自分の心理療法を、ロゴスすなわち世界の中における自己の状況の意味探求を伴うものであるとともに、「実存」(Existenz) すなわち状況に対して態度を取る自由意志、「意味への意志」の次元である精神次元を中心的な主題として扱うことを、その名称でも表しているのである。

2 カントへの言及箇所

以上の基本的人間観を踏まえた上で、本題に入る。『人間とは何か』におけるカントへの直接的な言及箇所は 9 か所ある。ただし、最後の箇所は「人格についての十命題」(改訂版) という別の論考を収録したものとなっており、本文と全く同じ文章が掲載されているため、実施的にカントへの言及箇所は 8 か所である。以下、一つずつ見ていくこととする。

¹⁾ 勝田茅生「ロゴセラピーの概念和訳の問題」『日本ロゴセラピスト協会論集』第 13 号, 2021, p.216

2.1 哲学を心理療法に応用することは妥当性、有用性を持つ

「ルードヴィッヒ・ビンスワンガーの証言に依拠するとすれば、フロイトは、哲学を「抑圧された性欲の最も上品な昇華形態」「以上の何ものでもない」とみなしていた」『人間とは何か』 p.52

「決断能力のある人間は、ある行動の見せかけの決定因にまさに抵抗することができるのである。そして、見かけ上は全能であるかのような諸条件に対して自由であることを喚起することは、とりわけ精神療法の役割なのである。「抑圧された性欲の最も上品な昇華形態」「以上の何ものでもない」(上記を参照)とのそしりを受けたその哲学こそが、この自由を明らかにする道を患者に指し示すことができるのである。したがって、カントの忠告に従うことが必要であるかぎり、私は哲学を医療として用いるつもりである」『人間とは何か』 p.53

この箇所はフランクフルが自身の心理療法に哲学を導入することを宣言したものであり、単に欲求のメカニズムとしての心理を扱う心理療法ではなく、個人の欲求を超えた世界の中における自己の状況の意味(ロゴス)の探求を伴う心理療法ということで、ロゴセラピー(Logotherapie / logotherapy) という名が与えられたと考えられる。

フロイトは、哲学というものを、いわば本能的な欲求をあからさまに見せずに隠すために、単に見かけ上美しく言葉で飾っただけの空虚なものの最たるものだと考えたようである。このような考えは、人間の本質的な価値を見失わせる見方であるとフランクフルは指摘する。このような「人間は～にすぎない」という還元主義的思考は、人間の自由意志の力を否定する考え方であり、これこそが、フランクフルの主な論敵であった。フランクフルが批判するのは、生物学的な仕組み、心理的な仕組み、社会的な仕組みに従って自動機械のように突き動かされ、自由意志の力さえ、これらの変形「にすぎない」と過小評価する人間像である。このような思考では、人間の努力や成果のすべては生物的、心理的、社会的な原因に帰されてしまい、個人の自由意志の役割を完全に見落とすことになる。

これに対して、フランクフルは、人間が自由意志、殊に「意味への意志」(Wille zum Sinn / will to meaning)を持つ存在であり、医療としての心理療法は人間の「意味への意志」を喚起すべきであるとの考えから、哲学を心理療法に応用すべきことを主張している。「意味への意志」とは、個人的な欲求を追求する心理ではない。フランクフルは個人的な欲求を持つ心理次元とは別に、個人的欲求を超えた「世界の中における自己の状況の意味」、言い方を変えれば、「人生に意味を求めるのではなく、人生から自分が求められていること」を自己固有の生きる意味、ロゴスにとらえている。このロゴスへの志向性、「意味への意志」は、心理次元とは異なる心の作用として規定される。哲学とはロゴスの探求である。すなわち、哲学は精神次元の作用である「意味への意志」の具現であり、それを喚起することを軸とした心理療法がロゴセラピーである。

上記引用文の最後に言及されている「カントの忠告」が何を指すのかは明示的ではないが、カントが哲学と医学の関係について述べたものとして、以下のようなものが知られている。

「養生法の原理としてのストア主義 (sustine et abstine 耐えよ、しかして避けよ) は単に徳論としての実践哲学のみならず、また医術としてのそれにも必要である。一医術は、自己自身に与えられている原則によって自己の感性的感情の支配者であるという人間に内在する理性の力のみが生活様式を規定するならば、このときには哲学的である」²⁾

これはカント自身の健康法として述べられた部分である。「理性の力で、哲学的な考えに基づいて生活を整えることは心身の健康にとって有用である」といった程度の意味であろう。

2.2 「世界全体の意味」は人間には不可知の領域だが、必要不可欠なものと推論される

「人生の意味に関する問いそのものは多義的である。そのため、われわれは以下の論述に先立って、あらかじめ次のような問題を除外しておくことにしたい。それは、あらゆる事象の意味の問題、たとえば世界全体の「目標や目的」に関わるような問題、あるいはわれわれの身に降りかかる運命や出来事の意味に関わるような問題である。なぜなら、これらすべての問題に積極的に答える権利は、本来、信仰のみに与えられているからである」『人間とは何か』 p.85

「目的というカテゴリーは超越的である。すなわち、目的は、それを「持つ」ものの外部に常に存在するかぎりにおいて超越的なものである。したがって、われわれは世界全体の意味をせいぜいいわゆる限界概念の形で捉えることができるだけであろう。それゆえ、このような意味を、おそらく超意味 (Über-Sinn) [意味を超えた意味] とよんでもよいのではないだろうか。この言葉で表現されているのは、全体の意味は捉えられず、かつ捉えられる以上のものである、ということである。この概念は、それゆえ、カントの理性の要請に類似していると言えるかもしれない」『人間とは何か』 p.86

ここでは、ハイデガーの「世界内存在」(In-der-Welt-sein) の概念がカントの不可知論と結びつけられていると思われる。人間は「世界の内側」にある存在であり、「世界全体」を

²⁾ 小澤幸夫「カントの大学論—『学部の争い』」『国際経営論集』No.35, 2008, p.64
Immanuel Kant, Der Streit der Facultaten. In: Kants Werke. Akademie-Textausgabe, Unveränderter photomechanischer Abdruck des Textes der von der Preußischen Akademie der Wissenschaften 1902 begonnenen Ausgabe von Kants gesammelten Schriften. Berlin: Walter de Gruyter 1968, Bd.VII, S.11. 訳は『学部の争い』小倉志祥訳、『カント全集 第13巻』理想社、1988年、309頁以下によった

意味づける「目標や目的」は、単なる言葉として考えることはできるとしても、その実際の意味を知ることが外部からしかできないため、人間にとってはそうした究極の意味は知り得ない、ということである。そのような世界全体の意味は不可知の領域として残しておき、「人生の意味」「生きる意味」(Sinn des Lebens / meaning of life) は、人間の知性で把握できる範囲に限って考察すべきだという論点である。

ただし、世界全体の意味を「人間が知り得ない、証明し得ない」ということと、世界には「意味がない」ということとは別で、むしろ「人生の意味」「生きる意味」を根拠づけるためには、人間の知り得ない意味領域において、世界全体に意味がなくてはならない(たとえ、その意味は人間には知り得ないとしても)とフランクフルトは考える。これはカントの倫理学と軌を一にする考え方である。カントは、魂の不死を理性が「要請する」と述べた。すなわち、人間の知性や言語では、魂の不死のような事象は証明が困難だが、それがなくては、人格の完成に向けて努力する根拠がなくなる。しかし、実践理性(良心・善意志)は人格の完成に向けた努力をせよと、内なる声として命じてくる。実践理性の働きとして否定できない以上、魂の不死は必要不可欠な条件である。現にあるという直接的な証明はできなくとも、現に内なる声として呼びかけてくる良心がある以上、その方向に進むべき根拠として、魂の不死がなくてはならない。このような論法が「理性の要請」である。

フランクフルトは、これと「同じ」ではなく、「類似していると言えるかもしれない」という婉曲的表現を取ってはいるものの、構造としては同一である。ただ、カントの理性の要請は、「理論理性によっては証明できないが、道徳的实践における無条件的な命令を根拠づけるために、実践理性が不可欠のものとして承認せねばならない、自由、魂の不死、神の存在の三命題」(デジタル大辞泉)とされるため、「世界全体の意味」はこれらと関連するけれども、カントによっては明示されていない、ということだろう。

2.3 目標ではなく、意味を実現した結果としての「快」

「われわれの考えでは、快樂原則は心理学的な人工物にすぎない。実際には、快樂は総じて、われわれの努力の目標ではなく、努力が実現されたことの結果なのである。このことは、すでにカントによって指摘されているところである」『人間とは何か』p.94

カントは『実践理性批判』(倫理学)と『判断力批判』(美学)の両領域において「快」について言及しているが、フランクフルトが依拠するのは前者である。ここでフランクフルトがいう「快」とは良心(実践理性・善意志)が内なる声として命じる道徳的な行為を自発的に行う際の満足感(意味欲求が満たされる感情)のようなものと思われる。

カントは「行為者の自発性の快、またこの自発性が行為者の本分の理念に適合しているこ

との快である」と述べている³⁾。

フランクフルトにおける「快」の議論は、フランクフルトの「幸福」についての議論と同じ構図で、「快」や「幸福」はあくまでも、意味あることを実践した「結果」として生じるのであり、それ自体を目的とすることはできない、とくりかえし強調され。ただし、これはあくまでも意識が精神次元に重点を置かれている場合に限るのではないかと筆者は考える。身体次元、心理次元は「快」を求めるのが自然状態であるように思われる。精神次元への意識の移行、視点移動が、自然状態では実現しない「課題」であるからこそ、殊更に強調して論じられる必要があると考えられる。

2.4 意味あることを実現するのが幸福の条件、快と幸福は直接追うほど遠くなる

「人間にとって重要なことは、快楽それ自体ではなく、快楽を得るための根拠である。快楽が実際に人間の志向の内容になり、場合によってはさらに反省の対象になればなるほど、人間は快楽を得るための根拠を見失い、また快楽もなくなってしまうのである。カントは、人間は幸福であることを欲するが、人間が欲すべきことは「幸福に値する」ようになることである、と述べたが、これに対して、われわれは次のように言いたい。すなわち、人間は本来幸福であることを欲しているのではまったくない。むしろ、人間は、幸福であるための根拠を持つことを欲しているのである、と」『人間とは何か』p.259

前節 2.3 では、「快」や「幸福」は、意味あることを実現したときに生じる「結果」だと論じられたが、ここではさらに、「快」や「幸福」は、それを追えば追うほど見失い、手に入れない、という論点が加わっている。犬のしっぽのようなもので、しっぽそのものを追いかけてもつかまえることができないが、目的に向かって進んでいけばしっぽも一緒についてくる、という話である。

フランクフルトは「成功」についても同じ構図で論じている。以下のような記述がある。

「成功を目的にしてはいけません。成功を目的にして得ようとすればするほど、それを手に入れることはできなくなります。成功を手に入れるためには、幸福を手に入れる場合と同様、自分からそれを追求してはいけません。幸福は、自分自身よりも大きな意味を持つ何かに自分を捧げたことの予期せぬ二次的効果として、あるいは自分以外の誰かに献身的に尽くしたことの副産物として現れるものです。幸福は、自分から求めるのではなく、自然に起こるようにさせなくてはなりません。成功についても同様です。自分が成功したいという気持ちを忘れることで、自然に成功が起こるようにさせなく

³⁾ 小林信之「カントにおける目的なき合目的性について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』No.66, p.4

てはなりません。そのためにはあなたの良心があなたに命ずることに耳を傾け、力の限り実践する努力を重ねてください。そうすれば、長い目で見て——長い目で見て、ですよ！——成功は、後からちゃんとついてきます。なぜなら、あなたがそれを考えることを「忘れていたから」なのです。」(V. E. Frankl, *Man's Search for Meaning*, Preface for 1992 edition)

「人間は本来幸福であることを欲しているのではまったくない。むしろ、人間は、幸福であるための根拠を持つことを欲している」という議論は、通俗的な幸福論とは真逆のものであり、直感的には理解しにくいかもしれない。身体次元と心理次元からなる心身態の欲求を中心に見る観点から、意味への意志を持つ精神次元の観点への移行を促す議論として理解すべきであろう。

2.5 定言命法、道徳法則

「出会いとは、そこにおいて相手が人間として承認されるような、相手への関係である。このことからすでに明らかになるように、相手は、目的に対する単なる手段としての利用される存在ではない。つまり、イマヌエル・カントの定言命法の第二式に従って言えば、他の人間を決して目的に対する単なる手段に貶めないということが、まさに人間的な態度とあり方の本質に属しているのである」『人間とは何か』p.267

「〇〇したければ、××せよ」のように、条件つきで示される行動指針を仮言命法といい、「〇〇したければ」がない、無条件に、良心の声として直接に心の内側から語りかけられるような行動指針を定言命法という。道徳法則とも言うべきものである。

カントの定言命法（道徳法則）の第一法則（第一式）は、簡単に言えば、「誰であつてもその場合そうすることが望ましいと思えるようなやり方を自分もするようにせよ」ということであり、第二法則（第二式）は、上にもあるように「他人を目的のための単なる手段とみなしてはいけない。人格を持つ存在として、他者を必ず尊重せよ」ということである⁴。

よく誤解されるのが、フランクフルは「他者を手段として扱ってはならない」と言っている、という見方である。人を何らかの手段として扱うこと自体はごく日常的にある現象であり、否定されるべきものではない（例えば、経営者は社員を事業目的の手段として扱う）。ただ単に手段として“のみ”扱うのではなく、同時に人格を持つ存在、つまり目的存在として“も”

4 「あなたの意志の格律が、いつでも同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為しなさい」（『実践理性批判』第1部第1編第1章第7節）、「あなた自身の人格にも他のあらゆる人の人格にも同じように備わっている人間性を、つねに同時に目的として用い、けっして単なる手段としてだけ用いることのないように行為しなさい」（『道徳形而上学原論』第2章）

尊重することが求められている。要するに、自分勝手な目的のために他人を利用してはならず、他人の協力を得たならば報酬や謝意という形で報いるべきだということだ。

2.6 超越論的カテゴリー

「この生きる意味は、われわれがそこから後戻りすることができず、むしろそれを引き受けねばならない城壁である。われわれがこの究極の意味を受け入れねばならないのは、その背後に回って問うことができないからである。というのも、存在の意味についての問いに答えようとする試みには、存在の意味がいつもすでに前提されているからである。要するに、人間の意味信仰は、カントに即して言えば、超越論的カテゴリーなのである。まさにカント以来周知のように、空間と時間のカテゴリーを超えて問うことは無意味である。その理由は簡単である。空間と時間をいつもすでに前提としなければ、われわれは考えることができず、それゆえまた問うこともできないからである。これとまったく同じように、人間存在は、たとえばほとんどそれに気づかないとしても、いつもすでに意味に向かっている存在なのである」『人間とは何か』 pp.388－399 (pp.451－452)にも同文が再掲されている)

「存在の意味についての問いに答えようとする試み」とはハイデガーの『存在と時間』の問題設定そのものである。「われわれがそこから後戻りすることができず、むしろそれを引き受けねばならない」という表現も、ハイデガーの被投的投企（世界に投げ込まれた自分が次なる在り方を企てていく）という人間の在り方を意識した表現と見られる。

カントへの言及は、2.2 節でも述べたように、「世界全体の意味」が人間にとって不可知の領域でありながら、人間の「生きる意味」の根拠として不可欠である、という議論に通じる。カント『純粋理性批判』で述べられているように、人間は、空間と時間というフィルターで物事を識別している。言い換えれば、人間の理解できる領域（カテゴリー）は空間と時間によって特徴づけられた事象のみであり、空間と時間という区切りがつけられない事象（たとえば「永遠」、「神」など）は、人間にとっては不可知の「超越論的カテゴリー」（超越論の領域）にあるもので、理性の要請としてそれが必要不可欠だという論証まではできるが、その内容自体を把握することは人間の力ではできない。論証を超えた意味については、個人的信念あるいは信仰（Glauben / belief）を持つことができるのみだ。

「世界全体の意味」や「存在の意味」は、このような性質を持つ「超越論的カテゴリー」に属するもので、人間の知性では完全に理解はできないものの、理性の要請として蓋然的にその存在を想定し、また個人的信念として想定することで、「人生の意味」「生きる意味」の源泉となっている。存在の究極の意味は人間の知性では知り得ない、ということに、人間である以上は耐えなければならないが、知り得ないことに失望する必要もなく、むしろ世界は汲み尽くせないほどの意味（超意味）に満ちている、ただそれが人間には部分的にしか理解

できないのだ、というのがフランクフルの考えである。

2.7 価値づけをすること

「ロゴセラピーから実存分析を経て医師による魂への配慮に至る道において、われわれがまず関わりあうことになるのは、およそどのような精神療法にも必ず伴っている精神的な問題性である。ここから、〔精神療法の〕境界線を踏み越えるという問題と危険とが本質的に必然的に生じてくる。(中略)ここでの問題は、ロゴセラピーや実存分析にとって、また、とくにそのような〔精神的なものの〕保障が求められている医師による魂への配慮にとって必要なものは何か、という問題である。この問題を、形而上学に関するカントの歴史的な定式にならって厳密に規定し直すとすれば、価値づけをするものとしての精神療法は可能であるのか、また可能であるとすれば、それはいかにしてか、と規定することができるであろう。あるいは、カントの書物の表題をアレンジして言えば、「価値づけをするものとして現れうるであろう将来の精神療法のための序説」の試み、と表現することもできるであろう。

とはいえ、われわれは事実問題に陥るのではなく、いつも権利問題に目を留めておかねばならない。心の医師はもとより、およそどんな医師でも、事実上、価値づけを行っているからである。どんな医師の行為においても、健康の価値とか健康回復の価値が前提されている。(中略)いかなる価値観も伴わないような医学的臨床は、もともと存在しないのである」『人間とは何か』 pp.393－394

この部分では、まず「ロゴセラピーや実存分析」「精神療法」「魂への配慮」という訳語を正確に理解し直すことが必要だ。「ロゴセラピーや実存分析」は、フランクフルが自らの心理療法を正式には「ロゴセラピー及び実存分析」(Logotherapie und Existenzanalyse)と呼んでいたものを表すのであり、「ロゴセラピー及び実存分析」や「ロゴセラピー・実存分析」などのほうが適切だと思われる。「精神療法」(Psychotherapie)は、第1節で述べたように「心理療法」と訳されるべきである。「魂への配慮」(Seelsorge)は、勝田茅生によれば、ドイツ語で「メンタルケア」という程度の意味である。『人間とは何か』の原タイトルはÄrztliche Seelsorgeで、邦訳書では『医師による魂の癒し』と訳されることがあるが、ドイツ語の慣用からすると『医師によるメンタルケア』が正しいと指摘されている(注1, p216)。

以上をふまえて、カントへの言及について考察しよう。

『人間とは何か』の訳注(六)(p.417)にあるように、「カントの書物の表題は『学として現れうるであろうあらゆる将来の形而上学のための序説』(Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können)」である。

続く訳注(七)(p.417)では以下のような説明がある。「「権利問題」と「事実問題」はカントの『純粋理性批判』に見られる概念。認識の成立する事実に心理的な過程の解明に関する

事実問題と、認識の正当化ないし根拠づけを主眼とする権利問題とが区別され、後者が哲学本来の課題とされる。『岩波哲学・思想事典』参照」。

「権利問題」(quaestio facti)、権利問題(quaestio juris)はもともと法律学の用語で、カントが哲学に転用した。要するに、出来事が起こったプロセスではなく、出来事の意味が共有される根拠を考える必要がある、ということである。

2.8 「意味への意志」の哲学的位置づけ

「意味への意志」の哲学的位置づけに関わる下記の箇所では、「アприオリ(カント)」と「実存囁(ハイデッガー)」の後に、本文中に〔 〕に括られた長めの訳注が付されている。

「さて、この意味への意志に関して言えば、それは不可欠の前提であり、「意味を意志する」こと以外われわれは何もできない。この意味において、意味への意志は超越論的であり、アприオリ(カント)〔経験に先立つ、あるいは経験に由来しないという意味。超越論的とは、経験の成立する条件として、そのようなアприオリ(カント)性を認める考え方をいう。『カント事典』弘文堂、参照〕なものである。あるいは、意味への意志は実存囁(ハイデッガー)〔実存囁は、ハイデッガーが『存在と時間』で「現存在の存在諸性格」をあらわす規程一般に与えた術語。現存在の存在である実存の構造を規定する概念の総称であり、「実存論的表現」、「実存論的概念」とも言い換えられる。実存囁はまず、「存在的」(ontisch)から区別された意味で「存在論的」(ontologisch)であるような規定をさすが、さらに、同じく存在論的規定でありながら現存在以外の存在者の存在を規定する「用具存在性」や「客体存在性」といった「範囁」と区別される。『現象学事典』弘文堂、参照〕である。われわれは、やっとのことで意味を見出したと思うまで、とにかく「意味を探し求め」ざるをえない。そういう意味で、意味への意志は人間の条件に組み込まれているのである」『人間とは何か』p.413

「意味への意志」は、 فرانクル思想及びロゴセラピーにおける中心概念であり、それを根拠づける概念としてカントとハイデッガーが引用されていることから、フランクルへの両者の影響が強いことが明らかである。

なお、ここではカントの部分のみを扱い、ハイデッガーの部分は別の論文で扱うこととする。

「人間は意味への意志を持つ」という事実は理解されるが、「なぜ人間は意味への意志を持つのか」、その仕組みは分からない。気がついたらすでにそうだった、というしかない。それが「超越論的であり、アприオリ」ということである。なお、アприオリはラテン語の *a priori*、「経験に先立って、先験的に」という意味であり、哲学の基礎を学んだ人の間では周知の概念であるが、こうした哲学用語が散見されるところにフランクルの哲学への強い志向が見られるとともに、彼の理論的著作がロゴセラピーに関心のある一般読者にとって理解困難とされる一因があると言わざるを得ない。

まとめ

本論文では、フランクフル思想及びロゴセラピーにおけるカント哲学の影響について検討してきた。ただし、直接的な引用のみを扱ったため、カントの名を出さずにカントの概念を前提とした議論については言及できていない。たとえば、ロゴセラピーの格率（Maxime、規範、道徳法則）として、「あたかも一度目の人生を失敗し、今が二度目の人生であるかのように生きよ」というものがある。これはカントの格率（道徳法則）を模してフランクフルが独自に作ったものである。良心の内なる声として、こうした呼びかけを受け止め行動せよ、ということで、フランクフル思想とロゴセラピーにとっての主要論点の一つである。こうした論点についても、カント哲学の前提があつての議論であるので、検討が必要だと思われる。

The influence of German philosophy on Frankl's thought and logotherapy (1) Focusing on Kant

Tadashi TAKENOUCHI

Abstract

This paper considers the influence of German philosophy on Viktor E. Frankl's thought and logotherapy which he founded as meaning-centered psychotherapy, especially focusing on the influence of Kant's philosophy. Frankl introduced Kant's philosophy mainly related to the issues of transcendental categories of *Critique of Pure Reason* (*Kritik der reinen Vernunft*) and ethics and practical philosophy of *Critique of Practical Reason* (*Kritik der praktischen Vernunft*). Frankl regarded his idea of the will to meaning belongs to the transcendental categories. Based on Kant's idea of practical reason and his deontological ethics, Frankl thinks of the function of conscience in the spiritual dimension.

keyword

Frankl / logotherapy / Kant / ethics / Kritik der reinen Vernunft / Kritik der praktischen Vernunft